

星田「(メニュー見て) よし、喰うぞ、今夜は、俺はね、サーモンフライ、牛のタタキ、それとサラダもらおうか、カニサラね、それからカツレツ、おう、この洋風春巻つてのもいいじゃない。お前は？」

背川「どうしたのお前？」

星田「何が？」

背川「お前、肉嫌いだったろ？」

星田「変わったの、体質が(メニューを見て) ボルシチか？」

背川「アホ、(ウエイトレスに) ビールね」

星田「俺は、ジンのストレート。(ウエイトレスに) 後、オムライスね」

背川「……仕事、上手く行ってないのか？」

星田「バツチリ、バツチリ、俺プロジェクトのチーフ」

背川「乾杯だな」

星田「一日十二時間働いている」

背川「別に問題ないか？」

星田「……問題ないよ」

背川「だけど普通じゃないぜ、お前？」

星田「……普通だよ」

背川「おい」

星田「何？」

背川「不二子(雄三)さんと、うまくいってないのか？」

星田「あいつ、三十二(〇〇)だ。……凄いよ」

背川「嫁さんに来た時は可愛かったじゃない」

星田「凄いよ、今は……」

背川「それで普通じゃないの。家庭を維持して行くにはさ……」

星田「お前にやわからん、ひとり者は黙ってるっての……」

背川「言ってる意味が解らんな」

星田「お前に甘えてんだよ。(ウエイトレスに) おばちゃん、ジンちょうだい

よ」

ウエイトレス、ムツとして、ビールとジンを運んでくる。

背川「気が悪くしないでね」

星田「真理さんどうだ連絡ないのか？」

背川「……ああ、時々ね、電話とか絵葉書が来る」

星田「ふーん。会ったのか？」

背川「……いや、向うは、大学時代の友達の家、転々としているらしい」

星田「ふーん。どういふんだらうな？」

背川「な？」

星田「お前だよ。婚約して家まで借りたのに、式の直前に蒸発されて、それでもそのまま新居に住み着いてる。カッコつかんだらうがよ」

背川「一応、プロデューサーだからな」

星田「何だ、それ？」

背川「トラブルはつきもんでな、いちいち尻まくってたら、商売あがったりだ」

星田、運ばれて来たジンをグイと呑んで。

星田「お前な、人を見るのが商売だとか、いろんな付き合いを、関係ってのか、それを壊さないで前向きにもつてくのがプロデューサーだって言ってるけど、それは違うぞ、勘違いだ、お前は臆病者」

背川「おっと、染みるねえ」

星田「人を見てるんじゃない、様子を窺ってるんだ。斜めから、後ろから、他人の頭のとっぺんから。そういうのをカラスの魚眼って言うんの、我々下司のサラリーマンの世界じゃ。ズル賢いだけ」

突然ハハハと星田が笑って、背川も笑う。

星田「面白いだろう」

背川「楽しいじゃない」

星田「ただな、お前は利口だから、キワどい時でも押しもせず引きもせず黙って見守っている。気の利いたひと言も言ってる。本当は臆病だからそうしか出来ないんだが、他人は何て懐ふところの深い人と勘違いして、いいか、勘違いしてお前を頼って来る。……悔くやしいよ、俺もお前しか甘える者がおらん。クソッ」

背川「甘えるのもいいけど絡からむなよ」

星田「お前は逃げん。俺は逃げてる。悔しいよ」

背川「(ウエイトレスに)ジン、ボトルで持ってきて」

星田「お前は、幸せか？」

背川「どうだらうね。お互い年を取った」

星田「なんのこっちゃ。お前は、幸せかもしれんな、本当の怖さを知らん」